様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０１６

研究課題名（和文）イラン概念再考―イルハーン朝末期の地方政権と古代ペルシアの記憶―

研究課題名（英文）The Idea of Iran Reconsidered: Local Dynasties in the Late Ilkhanid Period and Memories of Pre-Islamic Persia

研究代表者
大塚　修（OTSUKA, OSAMU）

東京大学・人文社会系研究科・助教

研究者番号：００７３３００７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、イルハーン朝時代（1256-1357）に繁栄したイラン系の地方政権におけるペルシア語文芸活動の庇護・奨励の実態を分析し、その政策がイラン概念の政治的復活に与えた影響について考察した。その結果、トルコ・モンゴル系の王朝に恭順したイラン系の地方政権が、自らの支配の正当性の拠り所として古代ペルシア諸王との紐帯をより強く意識し、積極的にペルシア語文芸活動を庇護・奨励した時代であることが明らかとなった。イラン概念の政治的復活という問題を論じる際に、これまで強調されてきたのはイルハーン朝が果たした役割であったが、イラン系の地方政権の果たした役割も含めて考察する必要がある点を指摘した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, through the investigation of Persian literature flowered under the patronage of local Iranian dynasties in the late Ilkhanid period (1256-1357), I evaluated its influence on the political reanimation of the idea of Iran. It was found that although Hazaraspids, one of the local Iranian dynasties, accepted the suzerainty of the Mongol Ilkhanid dynasty, justified its local power by emphasizing its character as a local Iranian dynasty and patronized Iranian cultural activities for this purpose. Previous studies tend to focus only on the influence of the Ilkhanid dynasty on the political reanimation of the Idea of Iran. However, it became clear that local Iranian dynasties also had significant influence.

研究分野：人文学

キーワード：イラン　イルハーン朝　ハザーラスプ朝　ハムド・アッラー・ムスタウフィー　ペルシア語文化圏　写本研究　歴史叙述研究

１．研究開始当初の背景

「イラン」という語を聞いて我々が思い浮かべるのは、現在存在するイランという国民国家である。しかし、「イラン」という語は元来地域を指し示す言葉であり、最初から国や政治単位を指し示す言葉として用いられてきたわけではなかった。「イラン」という概念の形成過程については、現在に至るまで様々な立場から研究者たちが議論を交わしてきており、これは、イラン史における重要な研究課題の一つだと言える。また、この研究課題は、現在の国民国家イランの成立にも密接にかかわってくる問題であり、現代的な意義も大きいテーマだと考えられる。ただし、イラン概念の変化を過去から現在に至るまで通時的に考察することは、扱う史料が膨大になってしまうということもあり、短期間の研究では難しい作業である。そこで本研究課題では、イラン概念の形成過程の中で最も重要な時期の一つだと考えられてきた、「イラン」という語が政治的に利用され始めるようになるとされるイルハーン朝（1256-1357年）という時代に特に注目したい。

２．研究の目的

本研究課題では、イルハーン朝末期地方政権の宮廷において、①どのような歴史作品・文学作品が編纂されていたのかを整理し、②その作品群の中でイランという語と古代ペルシアの記憶がどのように利用されているのか、及びそれらの作品を編纂させることにどのような意義があったのかを明らかにすることを目標とする。そのために、初年度から二年度目の前半までの時期に、未刊行史資料の収集・整理を行い、それらのデータベースを作成する。また、特に重要な史料に関しては校訂テクストを作成する。その上で、これらの史資料から得られる情報に依拠しながら、イルハーン朝末期地方政権の政策がイラン概念の政治的復活に果たした役割を検証する。

３．研究の方法

本研究課題では、イルハーン朝期以降に、イルハーン朝、及び地方政権で編纂された歴史作品・文学作品を網羅的に収集・整理し、それらがイラン概念の政治的復活に与えた影響を検証する。したがって、史資料の収集・整理と史料の読解が中心的な作業となる。史資料の収集は、研究代表者がこれまで本格的な写本調査を行えていないインドとエジプトの図書館、それに加えて、数多くのアラビア語・ペルシア語写本が収蔵されているイランとトルコの図書館で行う。

また、その中でも特に本研究課題にとって重要な史料だと考えられる、イルハーン朝末期のイラン高原の歴史が克明に叙述されている、ハムド・アッラー・ムスタウフィー（1344 年頃没）著『勝利の書続編』を校訂し、出版する。

以上の作業に基づく研究成果を、国内外の学会で報告し、論文として公表する。

４．研究成果

(1) 以下の国内外の諸都市において、イルハーン朝、及び地方政権で編纂された歴史作品・文学作品写本の網羅的な収集・整理を行った。その中で、特に重要な文献については、画像データ、あるいはマイクロフィルムの形で複写を購入した。

① 京都市（日本）：
京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター
② イスタンブル市（トルコ）：
スレイマニエ図書館
ミッレト図書館
トプカプ宮殿附属図書館
③ カイロ市（エジプト）：
エジプト国立図書館
④ トーンク市（インド）：
アラブ・ペルシア研究所
⑤ テヘラン市（イラン）：
テヘラン大学附属中央図書館
議会図書館
マレク図書館
⑥ マシュハド市（イラン）：
レザー廟附属図書館

この中で特筆すべき成果は、写本調査を行うことが極めて困難なトプカプ宮殿附属図書館（イスタンブル市（トルコ））において、貴重書に分類されている、イルハーン朝期に編纂された普遍史書、ラシード・アッディーン（1318 年没）著『集史』の二つの古写本（Ms. Hazine 1653 と Ms. Hazine 1654）のカラー画像の購入に成功したことである。この二つの古写本の画像データを入手したことにより、当時の知の伝達の実態がより具体的に明らかになりつつある。この『集史』に関しては、トーンク市（インド）のアラブ・ペルシア研究所において、これまで学界に紹介されていなかった写本（Ms. Udaipur 2588）を発見するなど、大きな成果が得られている。これらの写本調査の結果、中央のイルハーン朝だけではなく、同時代の地方政権でも多くの歴史書や文学作品が著され、書写されていたという実態が、具体的に明らかになった。

(2)本研究課題の成果については、「５．主な発表論文等」に記してあるが、この内、特筆すべき成果は、『オリエント』誌に掲載された「イルハーン朝末期地方政権におけるペルシア語文芸活動の隆盛：ハザーラスプ朝君主ヌスラト・アッディーンの治世を事例として」という論文である。本稿では、ハザーラスプ朝という研究史上注目されてこなかっ

たイルハーン朝末期の地方王朝に焦点を当て、献呈作品の序文と内容の分析という手法を用いて、この王朝におけるペルシア語文芸活動の庇護・奨励の実態とその背景について考察した。「トルコ・モンゴル系の王朝に恭順したイラン系の地方王朝が、自らの正当性の拠り所として古代ペルシア諸王との紐帯をより強く意識し、積極的にペルシア語文芸活動を庇護・奨励した」という本稿における結論は、イルハーン朝時代におけるイラン概念の政治的復活を考える上で、これまで見落とされてきた重要な視点である。

また、本稿における議論と『勝利の書続編』の読解を踏まえた、イラン概念の政治的復活に果たした地方政権の役割を指摘する英語報告をイスタンブルで開催された「ペルシア語文化圏学会第７回隔年大会」で行い、本研究課題の成果を海外の専門家に対しても披露した。この内容については、当日の議論をふまえ修正を施した上で、海外の雑誌に投稿する予定である。

(3)『勝利の書続編』の校訂作業については、テクストの部分の校訂はほぼ終了し、ペルシア語の序文を付し、テクストに微修正を施す段階に入っている。校訂本については、イランでの出版を計画しており、2016 年 3 月にテヘランで写本調査を行った際に、現地の研究者と出版の企画について相談し、出版交渉の準備を始めている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 大塚修、イルハーン朝末期地方政権におけるペルシア語文芸活動の隆盛：ハザーラスプ朝君主ヌスラト・アッディーンの治世を事例として、オリエント、査読有、第 58 巻 1 号、2015 年、40-56

② 大塚修、ハーフィズ・アブルーの歴史編纂事業再考：『改訂版集史』を中心に、東洋文化研究所紀要、査読有、第 168 冊、2015 年、245-289
http://hdl.handle.net/2261/59129

③ 大塚修、『集史』第 2 巻「世界史」校訂の諸問題：モハンマド・ロウシャンの校訂本に対する批判的検討を中心に、アジア・アフリカ言語文化研究、査読有、第 91 号、2016 年、41-61

④ 大塚修、『集史』の伝承と受容の歴史：モンゴル史から世界史へ、東洋史研究、査読有、第 75 巻 2 号、2016 年、掲載決定

〔学会発表〕（計 4 件）

① Osamu OTSUKA, “Abu al-Qasim Qashani’s *Zubdat al-Tawarikh* and the Historiography of the Late Ilkhanid Period,” International Workshop: Persian and Chinese Historiography in the Mongol Empire, 8th April 2015, Hongo Satellite, Tokyo University of Foreign Studies (Bunkyo-ku, Tokyo)

② Osamu OTSUKA, “Visualising General History: Hamd Allah Mustawfi’s New Style of Historical Writing,” 2015 年 5 月 17 日、日本中東学会第 31 回年次大会、同志社大学（京都府・京都市）

③ Osamu OTSUKA, “Hamd Allah Mustawfi and Iran-zamin: With a Special Reference to the Unexamined Source, the *Dhayl-i Zafar-nama*,” The Seventh Biennial Convention of the Association for the Study of Persianate Societies, 9th September 2015, Istanbul (Turkey)

④ 大塚修、イルハーン朝君主の称号と王権：イラン概念研究の視点から、平成 27 年度九州史学会大会、2015 年 12 月 13 日、九州大学（福岡県・福岡市）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
大塚　修（OTSUKA, Osamu）
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：00733007

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：